令和元年度 卒業設計公開審査会

乾久美子 × 尹莊植 × 畝森泰行 × 大西麻貴
× 大野敏 × 大原一興 × 佐土原聡 × 霜田亮祐
× 菅野裕子 × 妹島和代 × 高橋一平 × 高見沢実
× 寺田真理子 × 富永譲 × 西沢立衛 × 百田有希
× 藤岡泰寛 × 藤原徹平 × 萬代基介 × 安田博道

※五十音順

藤原　まず最初に皆さんから意見を聞きながら、今年のテーマというか、どういうことが大きなトピックだったのかを整理していきたいと思うのですが、佐土原先生からお伺いしたいのですが、いかがでしょうか。

佐土原　今回、瀬川さんと小野さんと金子さんの三名の方に入れたのですけど、それぞれ考え方とか空間のイメージがはっきりしているというようなことを元に評価させて頂きました。瀬川さんについては、防災を正面から捉えて頂いて、それでロードサイドっていう日常あまり良い景観じゃないと言われているものを逆に特徴付けて活かしていくという考え方でやって行くと、日本の色々なところのロードサイドが変わっていくということで、影響が非常に大きなことだと思いました。それから小野さんについては、皆様たくさん評価されていると思いますので色んなコメントが頂けると思いますけど、具体的に空間をイメージされて、頂上広場の景観や空間がより生き生きしていくようなことだったかなと思います。金子さんの生態系の原理を生かした建築群ということで、まだ答えははっきり出ていないと思うのですけれども、それにチャレンジしているということに非常に感銘を受けました。それであと全体的には例年よりも中身は濃かったなぁという印象で、皆さんかなり図面あるいは表現をしっかりされて、模型を作られているということで完成度が高かったのかなと、全体的な印象を持ちました。

藤原　高見沢先生、ご意見等どういう点を基準にしたか、お願いします。

高見沢　表の通りですが、実は最高点四人つけまして吉原賞三人選べと言われたのだけど二人にしました。話しますと、伊波くんのはとにかく面白くて、皆さんも面白いと言ってましたけど、都市計画的にも面白い。あのような衰退する住宅地において自ら手を挙げたものが乗っかっていくようなシステムで、バスのことも考えたらどうかということもありましたけど、いいなと思いました。伊波くんも一押しなんですけど、小野くんのは普通の市街地のところでやっていて、私の場合吉原賞候補というのはどちらも町に具体的に提案しているというもので、建築だけで勝負というものは私の専門ではないので、いいのはあったのですけれども外させてもらいました。二番目が小野くんです。あと阪根さんと金子さん。いずれもすごいなと思いましたし、特に金子さんの場合には梗概の方に、結論「まだ実験が終わっていないのでわからない。」と書いてありまして、これはすごいなと思いました。ついでに申しますと、梗概のレベルがすごく良くて、これ読んだだけで大体どういう人で何を設計したのかということがわかったので、そういう点ではかなり良かったと思います。ちょっとこれ駄目だなと思う作品が全くなくて、非常に良かったなというのを付け加えさせていただきます。

藤原　大原先生、お願いします。

大原　年齢順なんですね、わかりました（笑）。そこにある通りに上から言うと、瀬川さん・伊波くん・小野くんに付けました。全体の印象としてはここ数年そうなんですけれども、建築本体というよりも付加物とか媒介物とか、何か途中に噛ませることによって本体も良くなるし街全体が良くなるみたいな、そういった仕組みをみんな考えて提案してきてくれるだということに大変頼もしく感じていました。そういうものの典型が瀬川さんと伊波くんかなという感じです。瀬川さんもルールということで、何か変わっていくきっかけを法則化すると言うことは極めて計画的行為としては興味深いものだと思いました。その一方で、プログラムとかに関してはここ数年そうですけれども、割と皆さん安易に中身は押し込んでいるという感じがあって、その辺が全体に対して、地域の元々の本質的なニーズみたいなものを施設機能とかプログラムとかで表現してもらうのがちょっと物足りない感じが全体的にしていました。今の話でいうと、付加物によっていろいろ変

えていくという仕組みの中では、伊波くんの「バス停の家」っていうのも、これに関しては、実は常盤台のワークショップをやっていたら住民の人からこんな意見も出てくるし、あちこちで聞く内容ではあるけれども、きちんと卒業設計で形にして見せてくるっていうのが迫力あるし、力もあるなという感じがしました。そういう意味では地域の庶民感覚的なニーズみたいなものをちゃんと受け止めているのだなという感じがしました。それから小野くんのは、そういう施設機能をしっかり考えるというようなことにちょっと関係していますが・・・これもどちらかというと街全体をシステムとして考えるという風なところで評価した方です。横浜の典型的な高台丘陵地の街っていうのは同じ問題を抱えているところで、それに対しての非常に正統的な解決の方法が示されたような気がします。ということで三つとも同じ傾向のものを点数から見て選んでみたということになりました。

藤原　妹島さんお願いします。

妹島　みんな面白い計画が多かったなと思って、三つということで、瀬川さんのはやっぱすごいチャレンジングだし、一応それを五つのルールと言ってまとめていて凄く面白かったなと思っていて、あとはここで一番になっている小野くんの計画もすごくいい計画だと思ったのだけど、私が選んだのは久原くんと毛利くん。全体が建築のようなエリアのような、今まであまり体験したことがないような建築なのか場所なのかっていうものが出来上がっているところを評価して入れました。

藤原　毛利くんも同じような観点から・・・。

妹島　そうですね。全体が建築のようにも見えるし、それぞれがその全体としてあるエリアみたいなものができているようにも思うということです。

藤原　大野先生はいらっしゃいますか。大野先生お願いします。

大野　今年は全体的に完成度は低いのだけれども、完成度低いというか高いというか、みんなよくいいことまでいっているという感じで、とんでもなく不足的なものはないなという風に思いました。今回見ていると非常に多かったのは、発想を転換して何か解決しようとするところが極めて多かったなと思いました。一番最初の尾道の人もそうだし斜面ということで非常に使い勝手が悪いというか年寄りには困るようなところをうまく大きな敷地をつなぐ役割としてやろうとか、二番目の瀬川さんも評価が高くなっていますけど、大きな箱みたいなものをインフラとして使えばうまく使えるんじゃないかとか、そういうものがかなり多かったなと思いました。それで考え方はいいのだけど、一生懸命考えている解決が、プログラムまではいいのだけれどもなんとなく完成する前にまだちょっと図面も不満足というか物足りないなというところがありつつ、全体的にはレベルは高かったんじゃないかなと思いました。そんな中で小野くんのやつは図面も敷地の選び方も考え方、解決するところも丁寧にやっているなと、彼は建築史演習の幹事をやってくれた人で、ものすごく緻密にお金の計算とかをきっちりやってくれて過去最高の幹事で、事務処理能力も持っていて、今日の設計を見てなるほどと思いました。あとの二人は、バス停をやった伊波君。これは吉原賞に押したんですけど、条件が付いて、バス交通のあり方そのものの役割を発想転換していかないと、普通の交通体系であんな近い所にたくさんバス停が作られても困るので、そこを専用に回るようなコミュニティバスみたいなものを使って地域で楽しみましょうみたいな話にしてくれたら非常に面白かったなと思いました。非常に楽しんでやっているというところと、一つ一つの模型の前にこういうイメ ージだっていう絵を書いてくれているのがすごく共感できるところでそれは良かったと思います。もう一人の金子さんのやつも非常に楽しんで色々作ってそれをつなげて行っていて、実験っていうところがずるくて、未完成のところをうまく実験的と言っているんですけども、一応完成形としては見せて欲しかったなという風に思いますが、かなり楽しんでやっているということが共感を持てました。

藤原　富永先生、お願いします。

富永　私は三年後期のこの年代の学生の製図を見ていたので、大体人物像は分かってたんですけども、去年の卒業設計についてすごく苦言を呈して、こんな事をやってちゃだめだよなんて言ったのに比べて、今年はプレゼンのパネルの意図がかなり明快だし、やたらとでかい模型を作ればいいっていうそういう感じでもなくて、ちゃんと必要なスケールの模型を作って意図が明快だったなという感じがします。それと図面が充実しているなと思いました。去年と比べてですけどね。六ヶ月でやったということの密度感っていうか、思考したプロセスの密度感というものが図面の中に表現されていたなという感じがします。それで私が賞の対象に選ぶのでいいなと思ったのが五点ぐらいあったんですけれども、一番の林さんと、六番の伊波さんのバス停のやつと、小野さんと阪根さんと毛利さんっていう五人ぐらいいいたんですけれども、その中で林さんのは周りの風景というものを住宅地に着地して、それを取り込んでいてスケールもいいし、考えたことが魅力あるなという感じがしました。小野さんは非常に建築的な素養があるというか、この人は三年生教えた時もそういう感じがしたんですね。この人はどういう風に成長してきたのかなっていう興味が出たぐらいで、プロジェクトの全体が建築的で、才能がある人なんだろうなと思っていました。それから阪根さんのは真鶴の地形を分析してくれていたし、それから毛利さんのは全体の筋が良くて、これはもっとやればもっといい感じの全体、かなり大きいスケールでまちを動かしていくような大きな小学校と言うもので、まだデザインは未熟な部分があるのかもしれないけれども、筋道がすごくいいなと思いました。結果的には林さんと小野さんと毛利さんということで推薦しました。

藤原　では、霜田さんお願いします。

霜田　私は二年生の後期の、今は夏休みの集中講義ですが、ランドスケープ論という講義で教えています 。ランドスケープアーキテクチャーというのはどういうものなのかという。その時にいつも教えているのは、空間というのは、建築とかランドスケープとか庭とかに関わらず、人の日常的な生活

に関わることでもあるし、その場所が広い地域に繋がっていくという、地域性という面。あとは何かしら社会的なことと絡んでいるものでもあるので、要するに、日常性と地域性と社会性というものを考えて設計しましょうということを教えています。二年ぶりに今日発表された方の作品を見て、昨年から参加しましたけれども、昨年に比べると大分ランドスケープに関係するようなキーワードが出ているなと思います。例えば地形と暮らす学校とか、風景という言葉を使っている方も多いですし、あるいは流域とか、そんなキーワードなんかも上がってきていて、非常にランドスケープ的な観点から放り込まれているのがあって非常に楽しく聞かせていただきました。その中でかなり迷ったんですけれども、三作品選んだのが、伊波さんの「バス停の家」というやつ。これはあの道路っていう空間をさながら川の流れのように見立てて、ガレージも含めて道路という空間に流れていくもの停留させるような、そんな空間をプライベートスペースの中に作っていって、それが集積されることによって地域の固有のランドスケープが出来上がっていくんじゃないかなと、そういう可能性を感じた作品でした。いわば舟屋みたいなそんなものが作られているんじゃないかなという感じです。あとは、久原さんの寺院の「日常と弔いと僧侶」という作品で、これは講評の時も言いましたけれども、個々で寺院を経営するというよりかはいくつかの寺院が機能を分担して、都市空間なんだけどその中である地域性のようなものを構築して、人を弔うという場所を共有するという、非常に美しく、可能性を感じる作品だったかなと思います。それであと三つ目が藤井さんの雪景色のやつで、これ私しか票を入れていないんですけれども、個人的にはすごく良い作品だったなあと思います。というのは、近代土木遺構的な道路のために作られた土手っていうものを人の居場所として見立てて、そこに新たな価値を与えてくれている。それで土手っていうのはただ単に道路を通すために作られたものなのだけれども、それが結果的にそこを訪れた時に地域を見渡す視点場にもなり得るし、あるいはその土手を街中から見た時に、遠景の山並みがプレゼンボードの中に大きく表現されていましたけれども、土手の上に作られた大きな屋根、長い屋根の上に積もった雪が風景を眺めるためのフレームになっていて、さらに地域の風景が際立つというすごく次元の高いランドスケープデザインに昇華できているんじゃないかなと思って高く評価しています。今年の特徴としては、近代土木遺構や近代の都市計画の中に作られた空間を、今日的な価値を与えるべく別のものに見立てるということで、デザインに取り込んだ作品が多かったのかなと思います。見立てっていうものはすごくランドスケープデザインでやることで、例えば票は入れなかったですけど、穴掘るやつ・・・山内くんでしたっけ。排水口を別の空間に見立てそこを人の居場所にするとかはランドスケープデザイン的なやり方をやっているなと思って感心しました。とりあえず、以上です。

藤原　では次に、安田さん。

安田　今年、レジュメを昼休みにしっかり読む機会があって、みんなしっかりまとめているなとつくづく思いました。今まではちょっと計画の補助的な見方でしか見ていなかったんですけども、目的意識をしっかり持ってこのレジュメをまとめているなと感心しました。そんな中で、お寺の尾藤さんとかは非常にしっかりまとめているなと思いました。ただ思ったのは、このレジュメがまとまっているのと計画が必ずしも比例していないというか、むしろレジュメはよくないけども計画の方はいいなというものがあって、今回は計画で選んでいます。計画でいいなと思ったのは、小野くん。それから阪根さん。あまり票は入っていなかったんですが、斜面沿いに何かこう風景を作っていくということ、あとはパターンランゲージというか建築言語を作ろうとしているという意図が良かったなという印象です。それがうまくマニュアル化されていないっていうことがいいのか悪いのか、あまりマニュアル化されてしまうと案としてつまらなくなるんだけど、そこら辺のところでちょっと曖昧なところがあって評価は分かれると思うけれども、僕がいいなと思ったのは場所の選び方によって斜面沿いに風景がバーっと開けるところにポンと建物を作っていたりだとか、斜面に沿って屋根を作っているだとか、その景となって見えるような作り方、斜面に沿って屋根を作っているだとか、その屋根の形のランドスケープを考えているのでいいなと思いました。あとは毛利くん。これは計画的に真面目にしっかり取り組んでいるという姿勢がいいなと思いました。あと全体として周辺との関係とか地形との関係とかそれを考えている案が多いなという気がしました。逆に言うと、プログラムに対しては少し弱くなっているかなという気がしました。以上です。

藤原　大西さんお願いします。

大西　私も今年は取り組んでいる課題が面白い案がとっても多いなと思って、これから今はまだヒントみたいなものを伸ばしていって、大学院でも継続的に考えられたらいいんじゃないかな、というようなことがたくさんあっていいなと思いました。私がまずいいなと思ったのが瀬川さんの案で、やはり皆さんおっしゃっていることですけども、私たちが悪者だと思っているようなハコモノ建築っていうものがまちを救う拠点になっていくっていうことをずっと考え続けて、最後少し形になりつつあるというところまで来たっていうところが面白いなと思って、もっともっと発展できたらもっといいなと思いましたけど、ああいう視点で色々な町のこれからも別の切り口でやっていくこともできるんじゃないかとか、いろんな可能性があるなと思いました。あともう一つは毛利くんの学校。これもずっと継続的に同じ敷地で粘り強くブラッシュアップしていって最後に空間としても魅力的なものになっていて、言ってみたら一つの学校っていうプログラムであるにも関わらず、そこにみんながいろんな可能性を発見できるような建築になっていいなと思いました。あともう二人０．５っていう票を入れてしまったんですが、小野くんはたくさんの方が入れておられて、空間として伸びやかで気持ちがいいなということと、南さんは私しか入れないんですけれども、私たちが集落とかまちとか建築っていうものをどういう風にイメージするかということを、何か彼女なりの視点で新しく提示しようとしている。でもまだものにするところの力が足りていないという批判を受けて、その批判を受けたこともよかったなと思って、今考えていることをこれからも伸ばしていって、これも建築なんだって思うようなことにチャレンジしてもらえるとすごくいいなと思って入れています。

藤原　では、藤岡先生。

藤岡　全体としては密度が高かったなと思いました。そんなに全体的に差はなかったと思いました。それぞれしっかり考えられていましたし、全体を通してやりきれていなかったなという風に思いました。それで私はできるだけ散らばった方がいいなと思って入れて、でも大体一緒の感じですけど、伊波君と尾藤さんに入れました。それから最後の毛利君と。全体的に設計としてはある瞬間を切り取って提案するんですけれども、もうちょっと時間軸上の町だったり歴史だったりっていうものと、あるいは日常の生活だったりというものと、どんな風に建築が織り込まれていくかっていうことが若干物足りなかったなという風に全体としては思いました。そういう点で、伊波くんについては、普段郊外の住宅地のバス停、バス停って大抵みんな嫌がるんですね。家の前に立つと停車場になると嫌だし、大抵迷惑がられるんですけれども、この提案はむしろ是非停まってくださいみたいな、バスを使わない人でもバス停に停まって降りてそこでバス待ちとかで人が集まってくるっていうことが、もしかしたらそれが独居老人とかはそういう人を見ているだけで楽しいかもしれないし、だから急にバス停っていうワードが全く価値が反転するというか、そういう面白さがあるなと。確かにコミュニティバスのルートとかっていうのは気になりましたけれども、それがなくても単独で成立しそうな感じもありましたし、すごく面白いなと思いました。それから尾藤さんについては、レジュメをしっかり書いてるなと感心しました。建築が必要だという態度というか、問題意識というのが非常に明快だったなと感心しました。お寺の提案はもう一個あってそっちも非常に面白かったんですけども、尾藤さんの方はよりお寺の数が多いというか、群として地域に存在しているというところに着目して、プラス江戸時代から関東大震災から、焼けてもそこは寺であり続けるっていう、未来にわたってもきっとそこは寺のまま残り続けるっていうそういう場所の特性に着目して、それをつないでインフラのようにしてしまうという。地域の高齢化の問題もその中で解かれていくんじゃないか。そこは非常に賛同する態度だったなと思います。建築としてそれぞれの敷地がどういう場所になっていくのかっていうのは、若干物足りない感じがありましたけれども、非常に面白い提案だなと思いました。住宅地とお寺と学校という三者三様のところに票を入れたんですけど、最後の毛利君の提案も、大きな学校というタイトルで、普通学校は規模が大きくなりすぎると、大抵は学校の中での行動場面っていうものの多様性は失われていくという風に言われていますが、でも毛利君の提案は小中高と商店街と一体化して、街のように学校が発展していくっていう中で、非常に魅力的な場所がたくさん作られていた提案かなと思います。割と学校の建築は、基本的にはシステムの建築だと言われますけれども、片廊下型とか中廊下型とかっていう基本的な教室の配置が、実は学校だけじゃなくて商店街とかにも共通するかなり普遍的なビルディングタイプなんじゃ

ないかっていうところに気がついて、それを拡張したっていうのが非常に新しいなと思いました。そういうことで三つ票を入れました。以上です。

――第二回投票。（第一回で七票以上を得た五人に対して再度投票）

一押しに○、二押しに△。

藤原　この時間を使ってまたお話を伺いたいのですが、まだお話を聞けていない菅野さん、コメントを頂いても宜しいですか。

菅野　一番は久原くんだと思いました。理由は宗教というものの現代的意味をきちんと考えて抜いて、かつ現代において弔うという意味を考えた上で、それを建築の建築的問題・建築的思考にして建築として回答できているということがまず素晴らしいなと思って、その空間も是非行ってみたいなと思うものだったので、私にとって一番だと思いました。二番は小野君で、小野君のはどこがいいのか、言葉にしづらいしよく分かっていないというところが良さではあるんですが、どういうことかというと、今のその卒業設計、設計課題において現代の問題の欠点をプラスにするだとか、今目過ごされている良さを見出すとか、そういうことは非常に大事だと思うんですが、それの行為に特化するとなんとなくジャッジするっていう、建築家ってジャッジするものなのかっていう、私はちょっと閉塞感を感じる時があるので、そういうジャッジするっていうことをうまく逃れた上で、良い空間ができているんじゃないかなとなんとなく感じたところと、そのやり方を評価したいと思って小野君に入れました。三番は毛利君で、それは私自身、子供の頃学校がずっと嫌いで、学校っていう場所が大嫌いな空間だったんですが、この街に行ったら学校が良くなるかどうか分からない。けれども願わくば先生が多少変わってくれるかもしれないと思いました。やっぱり学校の中とかだと先生が特権的で、先生っぽいっていう感じになりますけど、ああいう街の中にいったら、もうちょっと人に優しい先生になってくれる、小学校の先生がなってくれるかもしれないという希望を持って、本当は毛利君以外にも南さん、藤井さん、山内君もとても良いと思って、すごく迷ったんですが、本当に迷っているんですが、個人的なそういう思いから毛利くんの作品に入れました。

藤原　歔森さん、お願いします。

歔森　はい。卒業設計ってやっぱり、個人個人の興味をいかに深めていけるかっていうが大事で、その後もずっと続いていくようなそういう長いスパンで考えるようなテーマだと思うんですよね。それが今回、個人の興味をすごく深めていっている案が多かったっていうのがすごく良かったなと。加えて富永さんもおっしゃっていたように、図面がそれなりにかけていたので、やっぱり自分の考えを抽象化させて推し進めているような案が結構多かったことが良かったかなと。ランドスケープ的なものも多くて、それが単に地域とつながってっていうだけではなくて、もう少し建築の方にさらに押し戻そうとしているような、そういう状態も見て取れたので、全体としてはすごくいい卒業設計だったんじゃないかなと思います。僕は小野君と金子さんと毛利君に入れまして、小野君はすごい断面図が良かったんですよね。起伏があるところをちゃんと書かれていてそこにカーブしている屋根があって、建築と地域が一体になってさらに力強くもある。その断面図はすごく良かったなと思って小野君はいいなと思いました。あとは金子さんの自然空間の話。プロセス自体がもうすごく現在進行形で、どこが終わりかわかんないようなすごく迫力のある作り方をしているのが良かったなと。あと毛利君も、そもそも学校ってなんだろうっていうぐらいのそういう問いかけをしていて、さっきおっしゃっていたように、そもそも先生って誰なんだみたいな、そういうことまで問いかけているような建築になっていて、僕はいいなと思ってその三人をあげています。

藤原　じゃあ、乾さんお願いします。

乾　今日は本当に素晴らしい一日で、改めて卒業制作って素晴らしいイベントっていうか、素晴らしい制度だなと思いました。学生の方々の集大成という意味でもありますけれども、社会的にはこういう機会を通していろんな問題が発見されているという感じがして、本当に今日はいろんな問題がすごい密度感で発見された場だったじゃないかなと、結構感動しています。あと発見されているというのと、何か未来が見えてくるという感じが今日は本当にすごく強い感じがして、そういう視点で選びました。そういう感じがするのは瀬川さんとか伊波くんとか小野さんとか久原くん、毛利くんというあたりでした。その中で三人ということでしょうがなく絞り込むということをして、伊波くんと小野くん久原くんとしました。特にこの三人を選んだのは、未来が見えてくる感じがものすごい批評的であると同時に軽やかに未来がやってくるというか、思わぬ視点から未来が広がっていくんだっていう感じがすごくよく出ていて、それは良かったなという風に思います。以上です。

藤原　西沢さん、コメント宜しいですか。

西沢　僕喋りすぎなんで。

藤原　じゃあ、尹さんお願いします。

尹　はい。都市計画研究室の尹と申します。久々横国の卒制発表会に参加しまして、自分がやったのが２００６年なので結構前なんですね。十年前の話で、今年はっていうことはなかなか言えない状態です。その中でやっぱり現在の立場を踏まえまして、都市的な課題とか魅力っていうものをどうやって出しているのかっていうものを少し重点的に見ました。それで全体的には、これまで都市の負というかネガティブ的なものへの着眼点っていうのはすごく素晴らしいなと思うし、ただそれが最後の建築まで本当に詰められたかどうかというのが少し課題だったのかなと思います。自分が三点あげたものとしては、伊波さんの案っていうのは、私的空間というものを公共的に利用しているのは近年の都市的な課題にもありまして、実際東京の世田谷区というところでも、自分の家の一部を地域の人に公開したり一緒に使ったりするっていう取り組みはあるんですね。ただそういうことを建築的に提案して、新たなモビリティも合わせて提案したのはすごく素晴らしいなと思いました。ただその地区内で完結するよりも、そういうものが都市全体で拡大、展開していてもすごく面白い案になるのかなと思いました。それで小野さんの案に関しては、裏にあった公園っていうものを、道を考え直すことで街がガラッと変わるっていうものはすごく魅力的で、沿道に屋根空間っていうかそこまで大きい提案ではないんですが、少しでもそういう細やかな提案で街がガラッと変わるって言うのはすごく建築の力なのかなということを再確認できました。最後に久原さんの案なんですが、それも一つ墓地とか寺院とか、一般の方が入れるところではないと思います。ただそういうところを塀っていうものに着眼して、そこを建築的に提案することで街がガラッと変わる、魅力的になるっていう事は素晴らしいと思いました。以上です。

藤原　一旦投票結果をみてみたいと思います。普通にいくと二人で大決戦ですよね。一人一票で手を挙げてもらいます。

（挙手）　瀬川さん八票、小野くん十一　票

藤原　はい。決まりました。最後は小学校的に決まりましたね。妹島さんが行かなければならないので、妹島さんが帰る前に一言。

妹島　おめでとうございます。すごくいい案がいっぱいあったし、地形とかランドスケープとかあったけど、日本の郊外とか、日本だけじゃなくて郊外って本当にひどいことになっていて、そこをもう一回見直せると。あれ見て私も本当にやっぱり郊外って嫌だなって思っていたんだけど、あそこからもしかしたら何かこうやっていけるかもっていうのを示してくれたのは素晴らしいなと思って勇気づけられたので、瀬川さん残念でしたね。小野くんのも素晴らしかったです。おめでとうございます。

藤原　時間がまだ十五分ぐらいあるので、小野君のスピーチは後でね。もう少し先生方にコメントを頂きたいのですが。寺田さん。

寺田　はい。今回、ここ数年ずっとみているわけですけれども、乾さんも絶賛されていたように、例年にないようなみなさんのクオリティの高さに結構驚きました。レベルが高いという風に言った方がいいのかもしれませんけれども、敷地の選び方だったりとか、問題の設定の仕方。それであと、梗概を見ていて、結構みんな参考文献をきちっと書いて、そういうのを読みながら自分の課題に対してどういう回答出していくのかっていう、そういう参考文献なんかもしっかり読み込んでいるって言うところがまた良かったんじゃないかなという風に思いました。その中で、ほぼみんな今年はレベル高いんでよかったんですけれども、私はその中でも小野くんが圧倒的に良かったんじゃないかなという風に思っていて、それは問題の設定もそうなんですけれども、プログラムの立て方、高齢化していく社会に対してどういう風に設計していくのかと

いうことと、あとは幹の道っていうのが現れてないっていう話もあったりもしつつも、でも最終的にはそれが幹になっていくような道ができていくんじゃないかなというような形で、建築そのものも結構緻密に設計されているところも素晴らしいなと思って、私は小野君が一番いいなと思いました。でももちろん伊波くんとかも面白かったですし、でももう少し展開がこれから先に見えてくるんじゃないかなっていうところで、私は伊波くんは残念ながら吉原賞には入れなかったんですけれども、他だと久原くん。久原くんは面白いなぁと思ったのは、スリランカでの木の下での説法という自分の理想とするイメージがあって、それをご自身の実家のお寺さんというところもあってか、リアリティのあるような問題設定をしていて、現代社会における課題、お寺が抱える課題をどういう風にプログラムを置いて、建築化していくかっていうのは素晴らしくリアリティのあるものでレベルが高いなと思って吉原賞に入れました。あとあまり入れてないので、山内くんの猿島っていう要塞は、ちょっと模型の作り方が白でいいのかなと思ったりもするんですけれども、でも遺跡っていうものをどういう風に歴史に接続して戻りながら未来を作っていくかっていうその問題設定だったり、やはり単純に美しいなと思って、新しい風景となる可能性がでるようなものなんじゃないかなっていうところで、これは他の学生のプロジェクトとは違って美しさみたいなものを私はあるんじゃないかなと思ってすごく期待をして入れました。入れたのは三つなんですけども、毛利くんの学校なんかも可能性は感じつつも、もう少し機能がどういう風に並んで行くとリアリティのあるものになって、新しい展開を生むのかをもう少し頑張って欲しいなというところもあったので、入れられなかったんですけれども、みんな頑張ってくれたなと思って良かったと思います。ありがとうございます。

藤原　次、百田さんお願いします。

百田　前半聞けなかったんですけども、終わってから少し話を聞かせてもらって本当に凄い良い提案が多かったなあというふうに思っています。瀬川さんのはアイディアの発明性もすごいなと思って、それまでロードサイドの商業施設っていうのは嫌なものっていう風に思っていたものが、やっぱりこれって何かあった時に必要なものだよね、それでそれを通して日常のコミュニティを作っていくっていうことに関しても何か貢献できるようなものになり得るかもしれないというような、そういう提案で目から鱗というような感じがしました。伊波くんも一万平米から引き続きやっていたものが、一万平米で提案としてまとまりきらなかったものが卒業設計でこういう形でまとまって、それがもう嬉しいと言う（笑）。はい。嬉しかったです。小野くんも丘に対して興味がずっとあったんですけど、丘と自分が興味のある人に着目した暮らしみたいなものが、、一万平米の時はちょっとスケールの選び方が上手くなかったところを歩行者空間にするっていうので、対象にするスケールがうまく卒業設計ではできていて、課題だったところがクリアされていてすごく良い提案だったなと思います。久原くんのもいいなと思って、お寺っていうのは塔頭で切って外と違う世界を作っていくっていう形で、特別な場所を作っていくと思うんですが、その塀をあえて少し壊して外と繋がる形でやってみるとどうなるのかを提案してくれて、確かにあり得るかも知れない。何か経路がひとつしかなかったものが少しネットワーク状になっていて、なるんだけれども真ん中に弔いの庭っていう一本の木が立っていて、それで説法が行われるっていうような中心みたいなものを感じて、お寺はこういう風に変わっていくといいなという風に思いました。毛利君は僕が最後に一番に押したんですが、いろんな提案がある中でアイディアの発見性と言うか発明が凄いなと思って、学校なんだけどまちのように感じられて、あるいは学校がまちのように感じられるって言うだけじゃなくて、その周りの街自体が学びの場所だっていう風に自然と思えてくるような提案だったんじゃないかなという風に思いました。いろんな屋根の掛け方とかいろいろあるんですが、アイディアの発明性というところを評価して僕は一番に入れました。

藤原　萬代さんお願いします。

萬代　萬代です。僕、卒業設計をすごい失敗しちゃって、こういう場所に来るとそれを思い出してすごい嫌な感じ．．．（笑）。この場はそういうわけじゃないんですけれども、今二年生を非常勤で教えていて、まだこの学生は直接教えたことはないのですが、僕は十七番の平松さん以降しか見ていないので、その中で毛利さんのを選びました。これは普通の中廊下式の今まである学校をくるっと裏表逆にしたものを背中合わせにしていくっていう形式の発見があって、それが面白いなと思ったこととその強い形式がありながらもきちんとそれをまちの中でうまく崩していくと言うか、そういうことをしているというところにすごい設計の巧さということを感じて、こちらに入れました。僕が聞いた中で気になったのが南さんの女の子のやつで、彼女は票を入れてないんですけれども、形にならないものをどうにか捉えようとしているっていうところがすごい共感はできて、ただやっぱりその最終的に建築にしてしまったというか、建築にしたことによって建築的にならなかったっていう風に思うんですけど、そこの部分がもったいなかったかなという風に思っています。

藤原　西沢さんぜひコメントお願いします

西沢　はい。賞決まっちゃったんであれなんですけど、僕も皆さんと同じ意見で、今回は非常に素晴らしかったと思います。何年ぶりでしょうか、こんなに感動したのは、というぐらいにすごく素晴らしい案が多かった。特に僕は四年前期教えていることもあって、皆さんの連続感が見えて、結果だけじゃなくてプロセスを見ているからかもしれない、そういう意味じゃそんなに客観的意見ではないのかもしれませんが、さっき乾さんがおっしゃっていましたけれども、まさに未来が見えるというのを僕は感じましたし、今回失敗した人たちも自分の失敗だと思った人もいると思いますが、その失敗も僕的には何というか、やるべき失敗というか、面白かったなと思います。その中ですごく失敗したなと思うんですけど、僕が一番に推したのは瀬川さんです。これはさっき妹島さんが言ったことがだいたいなんですけど、法律を作るっていう、法律を見れば未来がわかるっていうもので、建築家が法の網を掻い潜って建築を謳歌するじゃないですか。そういうのじゃなくて、ある種の理想って言うんでしょうか、そういうものがあると思う。あと未来というのもあるけど、同時に原始的。建築が原始的というか、要するにでかい建物があって安全性だと。目の前にすごい大通りがあって、我々が色々な近代のインフラを全て失った時にでもわかるような大通り。そういうものが皆を救っていくっていう。これはもう教育を受けてない人間でも誰でもわかるような、原始人でもわかるような普遍的な言語に着目して作ろうということで、これは本当に王道中の王道というものでした。提案している五原則を大きくして大言語にして作っているっていうのも富永さんの前で言うのもなんなんですけれども、僕はコルビュジェのようなものを感じたんですね。できてるものは確かにイマイチというかイマニというかイマサンというか（笑）。法律家がこういう法律書く時に横に書く挿絵みたいなやつで、粗野っていうかなんていうか、もう一般教養レベルです（笑）。建築が必修科目みたいで、等身大であれを作って、これが横浜国大の一等賞になったらこれは痛快だなというのは、僕は思っていました。そういう意味では、どの角度から見ても僕的には瀬川さんが一番。毛利くんも原始的っていうもののカケラを感じて、それはさっき色々うだうだ言いましたけど、街とか建築とか平面形式とか学校ってなんだとかいろんなことで、屋根の形が変だとか多様性とか文句は言いましたけど、これもある種の原始性を感じるというものがありました。あと今回名前を挙げられなかったようで、いいなと思ったものがいくつかあるのでそれについて言いたいと思うんですけど、一つは小林君ですね。大阪のバリケードの。僕実はずっと前期から見ててこれは難しいんだろうなと、バリケードは越えられないんだろうなと思ったんですけど、バリケードを取っ払ってやったのは個人的にはすごく素晴らしいなと思って、さっきも言いましたけど失敗ですら活用しようとするその現実主義が全体的にあって、今回はあまりその評価されなかった、票は集まらなかったんですけどいいなと思います。あと藤井さんの風景と建築っていうものを一つのこととして考えようとするプロセスっていうのも素晴らしいもので、もちろん屋根かけてどうだとか丘の形削ってどうだとか色々言いましたけど、全体的な姿勢というものが僕は素晴らしいと思ったし、良い道を歩んでいるなと思いました。あと何人かいたんですけど、ちょっと今あとがつっかえているので、あとで思い出したらまた言いますんで、いずれにしても全体的に学外に持っていって強く推薦したい案が多数集まる会で、非常に素晴らしかったと思います。どうもありがとうございました。

藤原　司会をするとなかなかコメントしづらいんですけど、まず小野くんおめでとうございました。今年の四年生は春からずっとゼミのやり方を変えて、ひたすら自分の研究テーマを毎週持ってきましょうということで、本読んで何か持ってくるということをやらせたんですけど、秋の出だしの感じだと失敗したかな、やめとけばよかったかなという風にちょっと思って、勉強的になっちゃっていて、先にレジュメがあって計画がないというのが良くなかったかなという風に反省していたんですけれども、結果的に今日見るとなんとなく皆さん褒めてくれてるし、独自のテーマの中での育ちというのがあるから、大学っていうのはそういう本を読んで考えてそこから建築を考えていくっていうのが重要なんだなっていうことを、一人一人に僕は感銘を受けたっていうか、全員の春の出だしをするとここまで来たかなと、それぞれの人に対する感想があります。なので、ここでどの人がどうだっていうのはないんですけれども、みなさんよく頑張ったなっていう風に思いますし、まだまだ先があるなっていうことも改めて感じた講評会で、素晴らしかったなという風に思います。

と思います。小野くんからと前に来てもらってもいいですか。じゃあスピーチをよろしくお願いします。

小野　今日は皆さん色々なお言葉をありがとうございました。自分が頑張るのは、家を建てるのがかっこいいというか設計者がかっこいいというか、それが仕事になったらいいなっていう感じだったんですけど、それだけじゃダメだっていうのを学んだと思っています。大学で。あの、皆さんに。構造もそうですし都市計画もそうですけども・・・(泣)すいません。こんなつもりじゃなかったんですけど・・・本当に、ありがとうございました。

（一同拍手）

同期のみんな、色々教えてくれてありがとうございます。手伝ってくれた後輩もありがとうございます。はい、以上です。ありがとうございました。

（一同拍手）

藤原　高橋さんお願いします。

高橋　結果出ちゃったのであれなんですけど、僕の中で一等は瀬川さんを入れていて、二番が小野くん入れて、あと金子さんを入れました。僕のコメントは手短にまとめますと、瀬川さんのは今まで建築になっていなかったものが建築に変わっていくプロセスっていうのがすごく知的に興奮を呼び起こすようなもので、そこにすごく希望があるという風に思いました。小野君は、ちょっとこれは個人的な印象があるんですが、小野くんっていうのは学部の三年から四年の初期まで地味な建築を作っていた人で、平地が出てくればグリットみたいな、すごく地味だったんですけれども、多分欲面と有機的な等高線の敷地を選ぶことによって感覚的に自分を追い込んだんではないか、それによってすごく開けた建築設計が可能になったんではないかという意味で、これは小野君にとって大事な作品になるんじゃないかと思っています。それから面白かったのは他にもたくさんあったんですけど、金子さんのは面白くて、生物多様性っていうものをどういう風に建築にしたらいいかっていう時に留学生寮を入れる。このアプローチはすごく面白くて、留学生っていったらいろんな人がいるわけですよね。肌の白い人もいれば黄色い人も黒い人もいて、もしかしたらゴリラとか麒麟なんかも一緒に住めるかもしれないっていうぐらい、多様性を示せたようなモデルが作れているんじゃないか。あともう一つは全体の決め方が面白くて、一三〇人までしかインタビューできなかったから一三〇個が建築になったっていうアプローチは今までないんじゃないかって思うんです。つまり今まで無限に続いていく形式を提案して、どこまでも広がっていけるような提案っていうのをやっていったり、ある都市の中のこの辺がこういう風になってすごいっていうのがあったりしたんだけど、自分の提案を決めるときのやり方が体力の限界で決まるっていうところが、活動が建築になっていくっていう意味で、何か違うものを持っているような感じがしてちょっと面白い案だなという風に思いました。